幼児の友人関係調査の一つの試み

幼児のソシオメトリック・テストについて

下坂雅子

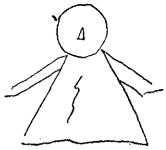
ソシオメトリック・テストによって、集団の構造や友人関係などを知ることができる。このテストは、集団成員相互の間の牽引と反発を調べるものであり、テストの最終目的は集団の再編成にある。

即ち、小グループを作る時など、誰がどこのグループに属すのが一番よいか、つまり創造性をよく発揮でき、よりよい適応を期待できるかを知る助けとなり、グループの編成に役立つものである（個人の希望をなるべく生かしながら、しかも全体の調和を考えて、公平にグルーピングしなければならない）。実施する時には編成の約束をあらかじめした方が望ましい。もちろん結果は固定したものではないからたびたびおこなった方がよい。

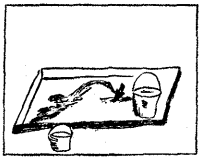
テストのし方は、小学生以上ならば「……する時、あなたの一番好きな友だちは誰ですか、一番嫌いな友だちは誰ですか。」というように質問紙によって調べることができる。しかし幼児（または小学校低学年）の場合は文字を自由に使うことが不可能であるので、個人面接によってたずねる方がよい。そしてその面接の際、ただ口頭だけによるのではなく、その集団全員の写真を補助に用いることができればなおよい。しかしこの方法では、成員全部の写真が必要であって、やっかいである。そこでもっと手続の簡単なやり方はないかと考え、写真の代りに子どもをかたどった切りぬき人形を用いてする方法を試みてみた。そして、従来の写真による方法と比較することによって、その方法がどの程度妥当であるかをためしてみた。

。切りぬき人形によるやり方

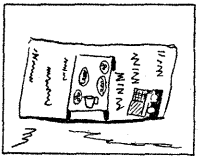
切りぬき人形は、画用紙に子どもをかたどって描いた簡単なもので、上半身のみの切りぬきである。人形は服の色を変えて12枚用意した（これは特に意味があるのではなく、ただ大勢の友だちをあらわそうとしたのである）。場面（規準）は「花いちもんめ」（全般的に友だちを知ることができると想定したもの）、「砂場」、「ままごと」の三場面とした。画用紙に下図のような簡単なものを描き、（「花いちもんめ」の場面は何も描かなかった）これを一場面ずつ示し、次のようにして友だちを選ばせた。人形を12枚全部机の上に並べて、「これはみんな○の組のお友だちですよ。」と言ってその中からまず自分を選ばせ、画面に置き、例えば「砂場」では、「お砂場をする時、一番一しょにしたい人はだあれ？　つれていらっしゃい。」と言って選択させ、画面に置かせる（名前だけ言って画面に置こうとしない子どもには、こちらで適当に人形をとって配置した）次に「もう一人つれてきましょうか、だれ？」「次は？」というふうにして選択させて、記録する。選択の人数は4人までとしたが、それ以上選択する子どもの場合はそれも受けいれた。



——実物の1/4大——



「砂　場」



「ままごと」

。写真によるやり方

写真は、一人ずつの手札型の写真の上半身だけを切りぬいたものである。35人の写真を机上に並べ一人ずつ確認させ（全員の名前を言えるかどうか。もしわからない写真があれば教える）てから、各場面ごとに自分を置かせ、次々に友だちを選ばせる。

。人形による方法と写真による方法との比較

クラス（5歳児、35名）を半分に分け、一方は人形による方法、他方は写真による方法でテストし、2週間後にもう一度同じことをくり返した。こうして2つの方法、即ち、人形を用いる場合と写真を用いる場合それぞれにおける、2週間隔という短期間の友人選択の変化を比較して、人形による方法の有用性を検討することにした（2週間隔の一致度が高い方が、他よりも信頼性が高いとみなす）。

その結果は第一表のようになった。一致度は各場面とも、人形でも写真でも殆んど変らないと言える。即ち、「花いちもんめ」60％（4人選択のうち2人～3人が一致している）「砂場」「ままごと」40％前後である。「ままごと」ではかえって切りぬき人形の方が一致度が高くなっている。しかし「ままごと」は男児の場合、動機の点で疑問がある（女児にくらべて動機づけが弱いとみられ、規準としてあまり適当ではなかったと思われる）ので比較することは適当ではないと思われる。写真を用いても人形を用いてもその効果は変らないということである。故に人形は手続が簡単なので利用価値があると言える。

	花いちもんめ		砂　場		ままごと	
	一致	不一致	一致	不一致	一致	不一致
人　形	43 % (59.7)	29 (40.3)	31 (42.5)	42 (57.5)	38 (49.4)	39 (50.6)
写　真	42 (60)	28 (40)	28 (39.4)	43 (60.6)	26 (36.6)	45 (63.4)

第一表　週間隔における友人選択の一致度

（4人共一致している場合には一致4，不一致0と数え，人数が一致していない時，例えば第1回のとき4人，第2回のとき3人となっている場合には，そのずれは不一致として数えた。
また幼児の場合，選択の順位に果して意味があるかどうか疑問があったので，第一選択のみについての一致度と，順位を考えずにとった一致度を比較してみたところ，第一選択のみの一致度は後者よりずっと低かった（10～20％）ので，選択順位は考えないことにした。）

更に、幼児のソシオメトリック・テストの結果と教師が判定したもの及び実際の行動観察によるものとの比較をしたが、ここでも写真と人形との間に大差はなかった。第二表は担任教師に子どもたち各々の仲よしの判定を願ったもの（「花いちもんめ」は、判定しにくいと思われたので、教師には全般的な「仲よし」を問うた。また「砂場」は男児のみ、「ままごと」は女児についてのみ判定願った）との比較であり、第三表は、実際に遊んでいるところ（自由遊び）を一人につき1日3分間観察して二十日間分を総合し、上位から四人（同点のため五人のこともある）とった場合との比較である（遊びの場面ごとではなく、いろいろな遊びの場面の総合である）。

	花いちもんめ		砂場(男児)		ままごと(女児)	
	一致	不一致	一致	不一致	一致	不一致
人　形	23 % (41.8)	32 (58.1)	24 (32.9)	49 (67.1)	26 (40)	39 (60)
写　真	25 (41.7)	35 (58.3)	26 (33.3)	52 (66.7)	14 (26.9)	38 (73.1)

第二表　教師の判定との比較

「花いちもんめ」は教師に願うとき3人と限定したので教師に合わせて一致・不一致を数えた。「砂場」と「ままごと」は教師の判定が4人以上に及ぶことがあったので，教師の方からみて数えた一致・不一致と，子どものテストからみて数えた一致・不一致とをプラスして計算した。また「特になし」と教師が判定したものは不一致として計算した。

教師の判定との比較では、「ままごと」を除いて写真でも人形でも同程度の一致度、即ち「花いちもんめ」では40％、「砂場」では30％の一致度であった。また、観察との比較では、どの場面とも二つの方法の一致度の間に殆んど差がない。即ち、「花いちもんめ」50％「砂場」40％「ままごと30％」であった。

	花いちもんめ		砂　場		ままごと	
	一致	不一致	一致	不一致	一致	不一致
人　形	70 % (49.3)	72 (50.7)	62 (44.0)	79 (56.0)	52 (33.5)	100 (66.5)
写　真	70 (48.6)	74 (51.4)	54 (37.1)	92 (62.9)	44 (31.2)	97 (68.8)

第三表　観察との比較

計算のし方は，やはり第二表のところと同様に，観察結果からみた一致・不一致と，テスト結果からみた一致・不一致とをプラスした。

（お茶の水女子大学）